(様式)府立松原高等学校 「学校運営協議会」報告書(第1回)

<table>
<tr><td>日 時</td><td colspan="4">令和6年7月8日(土) 14:30-16:30</td></tr>
<tr><td rowspan="11">出席者</td><td>運営協議会委員</td><td>職名等</td><td>学校事務局</td><td>校務分掌等</td></tr>
<tr><td>房本 晃</td><td>(福)バオバブ福祉会理事</td><td>山田 達也</td><td>校長</td></tr>
<tr><td>菊地 栄治</td><td>早稲田大学教授</td><td>麦田 伸一</td><td>教頭</td></tr>
<tr><td>野﨑 龍介</td><td>松原市立松原第三中学校長</td><td>中川 泰輔</td><td>首席・2学年代表</td></tr>
<tr><td>坂井 啓祐</td><td>四天王寺大学教授</td><td>伊藤 あゆ</td><td>首席</td></tr>
<tr><td>森岡 次郎</td><td>大阪公立大学准教授</td><td>眞杉 凌</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td>岡山 美保子</td><td>本校PTA会長</td><td>佐藤 智美</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>田ノ上 優光</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td colspan="4">教職員等</td></tr>
<tr><td colspan="4">沖 良輔、菊地 真祥、岡垣 有香、辻林 裕香、松本 優里、平野 智之(追手門学院大学教授)</td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="4">50 周年記念座談会パート1「松高、という経験」</td></tr>
<tr><td>協議内容の概略</td><td colspan="4">1. 学校長より
学校教育自己診断アンケート結果、学校経営計画および学校評価
2. 50 周年記念座談会(本校卒業生で現役職員へのインタビュー)
トピック1 松高で火がついた原点～先生との出会いで先生に
トピック2 「社会(大学)で向き合ったこと～コードを作る」
トピック3 教員になってみて～やっぱり生徒と関わる
トピック4 これからの問い～「松高する」とは
3. 協議委員からのご意見、提言</td></tr>
<tr><td>提言内容・改善方策</td><td colspan="4">・ほかの高校とかだったら、きっと考えないし、問わないし、いろんなことを自分の中で作りながら、感じながら、体験しながら過ごされたことがすごく伝わった。それは、何かのプログラムがあれば自然にそうなるわけではなくて、そこに先生という人が、いろんなできない部分をいっぱい含んでる人間として、現れたから起こった奇跡で、松高の究極の姿。
・例えば、フレイレの識字学校の学びという議論。識字学校の生徒さんは、いろんな差別を受けて、貧困の中で生きて、学ぶ機会を奪われてきた人たち。で、その学びとは何だろうと話をしながら、学校教育に生かしていこうとしてきた。結局、先生が先生でありながら生徒である。相互に関係性を持ちながら、自分を開き、そして生徒さんが開く。そのことを原点に、松高では学びを作り直せる。
・学校の教師は、この頃、弱さを見せない。自分の弱みを見せたら、学校作れない、クラスを作れないというふうに錯覚してる人が非常に増えてきてる。弱さを見せたとき、本当に、実は目を輝かせて聞くのは、いろんなしんどさを抱えてる子なんです。そんな教師に、そんな大人に出会うたことがない。だから、そういう教師になってもらいたい。
・信頼できる大人が松原高校にいて、その影響が大きかった。社会や、世界を見るとひどいことがたくさん起こってるような気がするが、どこにいても、自分の思いを伝えれば話ができるし、思いは伝わるしっていうのが、この学校の一つの大きな成果。だけど、それはハウトゥーで、こうすれば大人を信用できるようになりますっていう話ではないし、数値目標にしても仕方がない。
・小林さんが最後に、違いってこんなに面白いことであると同時に、怖いものでもあると。でも、面白いと思って、やっぱりつながっていきたということに今日、教えられた。3 人が、やっぱりそのかかわり、橋渡しをずっとしている。今、ともすれば、ほっといたままだったら、みんなばらばらにされたり、分けられたりしていく。つながっていく、違いを豊かにしていくっていうことに尽きる。</td></tr>
</table>